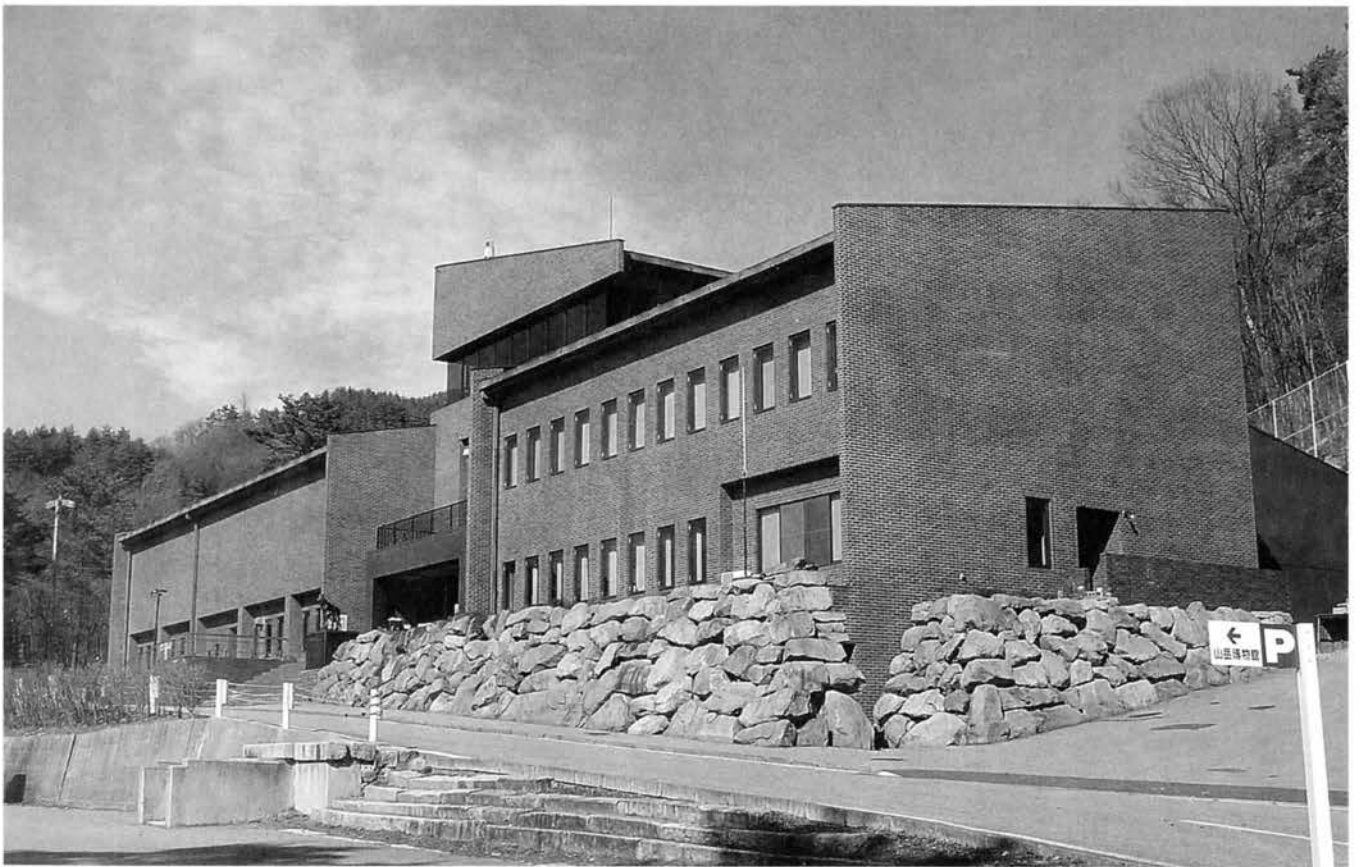


# 山と博物館

第51巻 第12号 2006年12月25日

市立大町山岳博物館

山岳博物館創立55周年記念特集号(後)



現在の山岳博物館。建物は三代目(1982～)です

## 未来に向かって

市立大町山岳博物館

### 博物館の現状

現在、山岳博物館ではライチョウの調査研究や付属園のあり方、博物館資料の収集・保存管理など、博物館の全体的なマネージメント(運営)にかかわるいくつかの課題を抱えています。山岳博物館が担うべき時代に則した新しい役割と今後の取り組み、活動方針を立て、使命書(博物館の任務、目的など)として、市民に示していく必要があると考えています。

そこで博物館では、果たす役割を明確にするために日本博物館協会「使命・計画作成の手引き」(日博協、二〇〇四)の「自己点検アンケート」を参考に点検しました。

### 博物館の課題

博物館は標本・資料の収集・保管・維持という長期継続的な責務を果たす必要があります。標本・資料の収集を軸に、教育、研究の営みを長期にわたって回転させていくことが博物館が社会に果たす役割の基本能力であると博物館法にもありますが、点検では、博物館活動の根幹である資料の保存・維持がほとんど機能していないことが浮き彫りとなり、資料整理と公開、それに伴う施設・設備の整備の必要性が明確になりました。

### 未来に向かって

大町市では現在、第4次総合計画の策定が進んでいます。総合計画では、今後博物館がどのような使命を持ってそれを果たしていくのかということとを明確にし、「使命書」にのっとり、博物館の中長期計画・年度事業計画を立て、事業を展開していきたいと思っています。

(山岳博物館創立五十五周年記念 企画展

「博物館のあゆみ」展示解説より)

# 山岳博物館創立五十五周年記念 博物館のあゆみ

(後)

## 市立大町山岳博物館

### 4、ライチョウ

#### ライチョウ、富士山に行く

一九六〇年(昭和三十五)八月二十日、日本鳥類学会の要請を受け、白馬岳と旭岳の間で捕獲したライチョウ七羽(オス一、メス二、ヒナ四)を自衛隊ヘリコプターとジープ、そして徒歩で山梨県へ輸送する協力をしました。そして翌日、捕獲したライチョウを富士宮口三合五勺の小屋の西北、市兵衛沢付近(約二六〇〇m)で放鳥しました。

当時のことについて、羽田健三氏は志賀自然教育施設研究業績第五号(一九六六)に「富士山のライチョウ」として記すとともに、その後の追跡調査について、六年間は繁殖を確認したと触れています。(その後の生存については確認はできないことから、絶滅したと考えられます。)



富士山でのライチョウ放鳥



爺ヶ岳でのライチョウ調査(夏)



爺ヶ岳でのライチョウ調査(冬)



ライチョウの低地飼育



山の自然科学教室

この教室は学校の夏休みを利用して、東京都内の中学生を対象に北アルプスの大自然の中で健全な身体と自然愛の精神を養い、あわせて都会と地方の教育的交流を計ることを目的としたものでした。

第一回は都内中学校を中心に一六〇名の参加があり、印東弘玄氏(東京教育大学)、鶴田總一郎氏(国立自然教育園)、羽田健三氏(信州大学)、田中邦雄氏(信州大学)が指導にあたりました。

以降、一九六六年(昭和四十二)まで八方尾根(白馬村)、黒沢高原(大町市)、針ノ木谷(大町市)などで一〇回開催しました。

#### ライチョウ調査(1)

一九六一年(昭和三十六)「北アルプス動物生態研究グループ」が長野県科学振興会より三〇万円の助成を受け、それに博物館職員が参加する形で、博物館の本格的な高山帯でのライチョウ調査が始まりました。一五〇日間にも及んだこの成果は一九六四年(昭和三十)に「雷鳥の生活」として刊行されました。

その後は、北アルプス以外でも一九八二年(昭和五十七)に中央アルプス駒ヶ岳、一九八三年(昭和五十八)及び一九八四年(昭和五十九)に八ヶ岳、二〇〇一年(平成十三)に白山において調査を行い、その結果はそれぞれ報告書にまとめ発表しました。

#### ライチョウ調査(2)

一九六三年(昭和三十八)、北アルプス爺ヶ岳において、山岳博物館としては初の積雪期におけるライチョウの生態調査が行われまし

た。

調査は種池小屋を拠点に三月十二日、四月二十日の四〇日間にも及びました。調査には通信連絡を担当する自衛隊松本駐屯部隊、大町山の会の協力を得るとともに、研究器材、燃料等は日向山からヘリコプターで空輸しました。

#### ライチョウの低地飼育

一九六三年(昭和三十八)六月、山岳博物館は爺ヶ岳よりライチョウの卵四個を採取し、博物館で孵化させました。これが低地飼育の始まりです。

それからは試行錯誤の連続で、飼育技術の確立に一定の成果をあげながらも時には孵化したヒナが一、二ヶ月で全滅したり、疾病により死亡してしまうこともありました。また温度管理や給餌飼料など未解決問題も残りしました。

二〇〇三年(平成十五)二月十七日、飼育下最後の一羽が死亡したことで、博物館はライチョウ保護事業検討会を設けこれまでの事業について総括し、今後の事業についてはライチョウ保護事業計画策定委員会にはかりま

した。そのなかでいくつかの提案を頂きましたが、財政面から事業を凍結することとしました。

#### ライチョウ会議

一九九九年(平成十一)に「ライチョウを語る会」が大町市で開催され、そのなかでライチョウ保護に関わる人たちの情報交換の場が必要であるとの認識が高まり大町市が提案して「ライチョウ会議」が発足しました。

以降、毎年、ライチョウが生息あるいは関心の強い各都県において開催されています。山岳博物館はこの会議の事務局を務めています。

### 5、野外・館内での活動

#### 山の自然科学教室

一九五七年(昭和三十二)七月二十六、三十日に、初めての「山の自然科学教室」が木崎湖夏期大学や北アルプス八方尾根で開催されました。

この教室は学校の夏休みを利用して、東京都内の中学生を対象に北アルプスの大自然の中で健全な身体と自然愛の精神を養い、あわせて都会と地方の教育的交流を計ることを目的としたものでした。

第一回は都内中学校を中心に一六〇名の参加があり、印東弘玄氏(東京教育大学)、鶴田總一郎氏(国立自然教育園)、羽田健三氏(信州大学)、田中邦雄氏(信州大学)が指導にあたりました。

以降、一九六六年(昭和四十二)まで八方尾根(白馬村)、黒沢高原(大町市)、針ノ木谷(大町市)などで一〇回開催しました。



小鳥の声を聞く会



動物写生大会



山博おもしろミニゼミ



大町文化祭で特別展のPR



映画「白い山脈」撮影

### 小鳥の声を聞く会

一九五八年（昭和三十三年）、「小鳥の声を聞く会」という名称で初めての観察会が行われました。その後、長らく長野県山岳総合センターを借り切つて一泊二日で行いました。最近では早朝に博物館に集合して鷹狩山までの間で観察を行っています。

### 動物写生大会

一九八七年（昭和六十二年）、日本動物園水族館協会への加盟に伴い初めての「動物写生画大会」を開催しました。以降、毎年開催し、参加いただいた全作品を企画展「動物写生画展」として開催しています。

### キノコ学習会

一九八二年（昭和五十七年）九月二十五日、十月三日の間に、「キノコと秋の草花展」を開催し、一九九八年（平成十）からは「キノコ展」と名称を改め、現在に至っています。企画展中は「キノコ鑑定」、「キノコ学習会」をあわせて開催しています。

### 山博おもしろミニゼミ

二〇〇二年（平成十四年）、運行の始まった市内循環バス「子供体験学習号」の到着時刻にあわせて「山博おもしろミニゼミ」を始めました。その後バスの運行はすぐに打ち切られてしまいましたが、現在でも季節などにあわせて観覧者を対象に一〇〜二〇分ほどの説明を行い、年間、千人余りの方にご参加いただいています。

### 山博ゼミ

二〇〇三年（平成十五年）三月、博物館学芸員がこれまでに研究した成果や耳寄り情報を市民や地域住民の方々により知ってもらうと、毎週土曜日に地元新聞「大系タイムス」に連載を始めました。

二〇〇四年（平成十六年）三月からは大町市文化財センターと隔週で担当し、学芸員のみでなく飼育員を含めたスタッフ全員による執筆活動が続いています。これまでに一一〇余りの話題を提供しています。

### 公式ホームページ

一九九九年（平成十一年）、インターネット

の普及にともない、博物館の情報を広く発信できるように公式サイトを開設しました。

現在では、博物館の常設展、付属園の動物たちの紹介や鳴き声をはじめ、企画展やイベント、学芸員情報、飼育員の奮闘記など日々、新しい情報を全国に向け発信しています。

公式サイト

URL <http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpaku/>

## 6、企画展・特別展

### 大町文化祭

一九五二年（昭和二十六年）、十一月より五日まで文化祭に参加し、特別展を開催しました。

人口わずか一万七千人の町の博物館にこの間、一万一五〇名もの観覧者が訪れ、新生博物館への関心の高さが示されました。

### 博物館資料陳列所

一九五〇年（昭和二十五年）三月、また山岳博物館が誕生する以前、大町公民館の文化部は、大町駅構内にスペースを無償で借り受け、山岳写真二点、動物剥製四点を展示しました。

以降、この展示は一九八〇年（昭和五十五年）まで、入れ替えを行いながら観光客の方を中心にご覧いただきました。

### 映画「白い山脈」を上映

一九五七年（昭和三十二年）、ついに大映日本アルプス撮影隊による長編記録映画「白い山脈」が完成しました。雄大な北アルプスを背景に高山の動植物の生態について撮影したこの映画は、皇太子殿下（現天皇陛下）を招いての試写会も行われました。映画は文部省特選に入り、大町でも六日間の上映が行われました。

このとき、撮影指導にあたったのは山岳博物館でした。

### 過去五年の企画展

二〇〇二年（平成十四年）

対山館と百瀬慎太郎 岳都大町に花開いた

登山文化の原点を探る

二〇〇四年（平成十六年）

伊藤孝一没後五十年 山岳映画誕生雪の絶嶺にカメラを廻す

二〇〇五年（平成十七年）

播隆・槍への道程―善の綱をたどれば―

二〇〇六年（平成十八年）

ボタニカルアートで描く くさばなの一生

―日本の草本と外来草本の生活史―

その営みとなぞにせまる!!

### 過去五年の特別展

二〇〇三年（平成十五年）

志水哲也写真展「黒部」

穂苅三寿雄作品展「北アルプス黎明」

第五回「日本山岳画協会大町展」

- 二〇〇四年(平成十六) 森下恭写真展「大いなる黒部」
- 二〇〇五年(平成十七) 近藤辰郎写真展「槍ヶ岳賛歌」
- 二〇〇六年(平成十八) 菊池哲男写真展「白馬」

### 7、刊行物

#### 『山と博物館』

一九五六年(昭和三十一年)二月二十日、大町山岳博物館後援会から月刊機関誌『やまと博物館』が創刊されました。

一九五七年(昭和三十二年)一月号からは『山と博物館』(山岳博物館発行)となり、毎月、各分野の方々に原稿を寄せていただくなどして、北アルプスを中心とした山岳の自然や歴史などの「山岳文化」と博物館の活動について広く情報発信を続け現在まで五一巻一〇号までを発行しています。

- 定価一〇〇円
- 年間購読料一五〇〇円(送料含む)

#### 『雷鳥の生活』

■絶版

#### 『新・北アルプス博物誌』

■定価三一五〇円

#### 『カモシカ 氷河期を生きた動物』

■定価二六二五円

#### 『ライチョウ 生活と飼育への挑戦』

■定価二六二五円

#### 展示解説書『北アルプスの自然と人』

―市立大町山岳博物館展示案内―

■定価三五〇円

ガイドブックブルーガイド新シリーズ

『日本再発見ブルーガイド旅読本』

―上高地 安曇野―

―輝ける大地の自然と人―

■定価一七八五円

### 8、観覧者数の推移と意識

#### 観覧者の推移

観覧者数は一九八五年(昭和六十)の九万三千人余りをピークに昨年まで前年度を下回る傾向が続いています。

近年では、二〇〇四年(平成十六)の集中豪雨による博物館までの通じる道路法面の土砂崩れによる車両の通行規制が年内中生じたこと、また、二〇〇五年(平成十七)年には、建物にアスベストを使用している可能性が指摘され、観覧者の入込が集中する夏期に臨時休館したことが、大きな影響と考えられます。一方、ニーズの多様化の把握・対応がしきれていないことも考えられます。

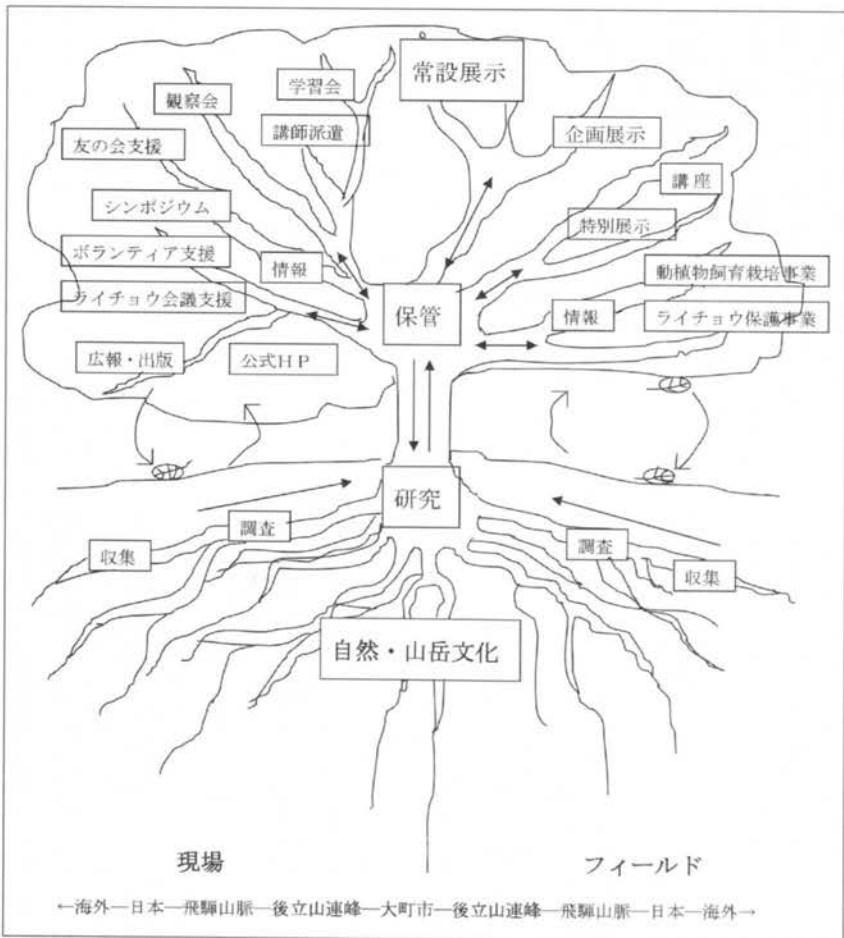
#### 観覧料の変遷

観覧料は物価や時代の背景に応じて、また周辺の博物館および美術館をはじめ、県内外の同等施設と比較しながら、これまでに八回の見直しを行ってきました。

現在は、大人四〇〇円、高校生三〇〇円、小・中学生二〇〇円(団体は三十名から各五〇円引き)としています。

#### 観覧者へのアンケート

二〇〇六年(平成十八)八月十一日〜二十日に館内でアンケート調査を行いました。その結果、博物館を利用しているのは、市



市立大町山岳博物館の活動イメージ(琵琶湖博物館の活動イメージを参考に作成)

職員による「自己点検」だけでなく、多くの方の意見を取り入れ解析し、方向付けをしていきたいと考えています。

(おわり)

#### 山と博物館 第51巻 第12号

発行 二〇〇六年十二月二十五日発行

〒388-0002 長野県大町市大町八〇五六―

市立大町山岳博物館

TEL 〇二六―二二―〇二二一

FAX 〇二六―二二―二二二二

E-mail: smp@city.omachi.nagano.jp

TEL: http://www.city.omachi.nagano.jp/smp/ku/

印刷 奥村印刷

定価 年額 一、五〇〇円(送料含む)(切手不可)



この「山と博物館」は再生紙を使用し、石油溶剤の代わりに大豆油を使用した大豆インキで印刷しています。